

季節の室礼

季節を盛る 言葉を盛る 心を盛る

「室礼」とは一年の節目に、また人生の節目節目に“季節を盛る”“言葉を盛る”“心を盛る”ことを言います。行事とは行うことであり、先人の霊を招き、客人を招き、感謝の心を供すること。その時々季節にあわせて野菜や果物、花などを盛って、もてなしを形にし、心を込めて表します。



写真：安井進

受講の感想

昔は、「7歳までは神の子」と言われ、7歳になって初めて社会の一員として迎えられたそうです。子どもが健康に育つということがそんなに簡単ではなかったわけで、あらためて自分や我が子の健康に感謝しました。千歳飴は子どもの長寿を願い、ほうきは災難をはき捨て元気に育つことを表し、熊手は子や子孫が多くの方の徳を頂けるようにと祖父母の気持ちを表しているそうです。お神には麻（麻はまっすぐ正しい環境の中で伸びていく植物で、結びを左につけることで神様と結ばれることを意味する）を結びました。娘がいるので女兒用のうろこ模様の細紐やかんざし、笥迫を身につけました。細紐はしつけをつけたままが正しいと習い驚きました。しつける。につながり、取ってしまっただけはいけません。七五三は、その子の命に感謝しさらに成長を祈る大切な儀式。その意味や思いを子どもに伝え、両親や大勢の方に見守られ大切に育てられてきたことへの感謝を子どもが覚え、その思いを次につなげていってほしいと思いました。（熊丸梨奈）

霜月（七五三）

子供達の成長過程を無事過ぎることのお祝と、厄除けの行事である七五三。

中世以来、宮中や公家・武家で行われていた、

男女三歳の髪置、男児五歳の袴着、女児七歳の帯解、

その3つの儀式にちなみ、

扇、袴、笥迫、髪飾りなど、

身につけるものを主にしつらいます。

神社でお参りした時にいただく紅白の千歳飴。その袋に描かれている松竹梅や鶴亀、お爺さんとお婆さんは、長い袋同様に長寿を願うおめでたい模様です。

他に赤飯や柿、括り猿（難を去る）、柿（嘉来）七つの徳があるといわれている）、笥迫、組み紐、かんざし、扇子など、それぞれの儀式にまつわる品をしつらえて、その歳まで無事に育つことに感謝をし、いつその成長を願います。

山本三千子先生の著書：「室礼おりおり」(NHK出版)、「暮らしの室礼十二か月」(淡交社)、「[四季の行事]のおもてなし」(PHPエル新書)ほか。

提供：室礼三千（しつらいさんぜん）

東京都杉並区浜田山3-16-5 Tel 03-3304-7020（火～土曜日午前10時～午後5時／日・月曜定休日）●体験教室もあります